

学校法人広陵学園 広陵高等学校 令和6年度自己評価

1 ミッション（地域社会における自校の使命）

高い志を持ち、自らの夢や目標に向かってチャレンジする生徒を育て、地域社会・国際社会に貢献する有為な人物を育成する。

2 ビジョン（使命の追求を通じて実現しようとする自校の将来像）

1. 授業が真剣勝負の学校
2. 明るい笑顔の挨拶が交わされる学校
3. 掃除の行き届いた美しい学校
4. 部活動・学校行事・ボランティア活動に励む活力ある学校

3 目標の設定と評価

学校経営目標						
達成目標	評価指標	令和6年度			令和7年度 目標値	
		目標値	実績値	評価		
1 学力の定着と個に応じた進路実現に努める						
「わかる喜び」を実感させる授業展開	授業アンケートによる生徒評価（生徒の自己評価部分の平均）	84.0 ポイント	82.1 ポイント	4	84.0 ポイント	
自宅学習時間の確保	「学年＋1時間」の実施割合（令和7年度から「授業以外の学習時間」とし、目標値を「学年＋1時間」ではなく、「1日3時間」とする）	特進 50% 総進 20%	1年 18% 2年 16% 3年 90% 1年 3% 2年 4% 3年 2%	1 1 4 1 1 1	特進 50% 総進 20%	
Classi を有効活用した基礎学力の向上	模試平均偏差値（国語・数学・英語）	48.0(進研1月)	46.1(進研1月)	1	特進：48.0	
		1年 48.5 2年 46.5 (進研1月)	1年 46.3 2年 46.0 (進研1月)	1 1	1年 48.5 2年 50.0 (進研1月)	
学習意欲の向上	個人面談を充実させる	6回(1年) 6回(2年) 6回(3年)	6回(1年) 6回(2年) 6回(3年)	4 4 4	6回(1年) 6回(2年) 6回(3年)	
教職員の進路における指導力の向上を目指す	大学入試問題・模試及び進路検討会議の回数	3回	3回	4	3回	
大学進学希望者全員で大学入学共通テストの受験を目指す	大学入学共通テスト受験者数	180名	135名	2	令和7年度はこの項目を削除する	
個に応じた進路指導を行い進路実績を高める	国公立大現役合格者数	20名	14名	2	令和7年度は評価指標を変える（検討中）	
	修道大学合格者数	70名	85名	4		
	安田大学合格者数	25名	27名	3		
	就職希望者の内定率	100%	100%	4		

2. 基本的な生活習慣の確立を図る						
遅刻者を減らす	1日当たり遅刻者数 (%)	1.0%	1.59%	1	1.0%	
特別指導件数を減らす	特別指導件数	10件	27件	4	10件	
転学者・退学者を減らす	転・退学者数 (%)	1.0%	2.1%(31名)	2	1.0%	
いじめを撲滅する	いじめの認知件数	0件	15件	1	0件	
美化の徹底	取り組む姿勢	4.80	4.40	1	4.80	
校内美化アンケート	ごみの分別	4.90	4.60	2	4.90	
3. 文武両道をめざした特別活動の活性化に努める						
学校行事の満足度を高める	アンケート満足度 (肯定%)	90%	95.4%	4	90%	
		90%	95.4%		90%	
生徒会各委員会の活動を活発にする	委員会の開催回数	20回	24回	4	令和7年度は数値目標を設定しない	
部活動への参加率の向上を目指す	部活動への参加率	65%	62.9%	1	65%	
中国大会・全国大会の出場を目指す	全国大会出場部数	9部	9部	3	令和7年度は数値目標を設定しない	
	中国大会出場部数	9部	8部	3		
4. 国際理解教育の充実・深化を図る						
海外長期留学特進プログラム参加者数2名を目指す	海外留学特進プログラム参加者数	1名	0名	1	1名	
イングリッシュキャンプ参加者数20名を目指す	イングリッシュキャンプ参加者数	15名	12名	2	15名	
サマープログラム参加者数15名以上を目指す	サマープログラム参加者数	10名	9名	2	10名	
英語検定試験準2級以上の合格者数	準2級以上合格者数	90名	76名	4	90名	
	準1級合格者数		0名		1名	
	2級合格者数		11名		15名	
	準2級合格者数		65名		75名	
5. 保護者や地域に開かれた学校づくりに努める						
オープンスクール等の広報活動を充実させる	全体参加生徒の数	1600名	1365名	2	1500名	
	第1回	700名	530名		500名	
	第2回	500名	431名		500名	
	第3回	400名	404名		500名	
オープンスクールの内容、方法を一層充実させる	参加中学生のアンケートによる満足度	100%	98%	3	100%	
ウェブサイトを効果的に活用し情報公開に努める	更新回数 (令和7年度は、小さな変更はカウントしないように見直す)	約500回	300回	2	150回 (カウント対象を変更する)	
地域の行事への生徒の積極的参加	参加回数	15回	15回	3	15回	

4 現状分析と今後の課題

学校経営目標				
達成目標	近年の現状分析と令和5年以降の見通しと課題			
0 全般的な分析				
生徒募集と入学生について	●直近3年間の入学生	令和5年度	令和6年度	令和7年度
	男子（前年増減）	320 (+45)	286 (-34)	263 (-23)
	女子（前年増減）	218 (+20)	216 (-2)	203 (-13)
	計（前年増減）	538 (+65)	502 (-36)	466 (-36)
	<p>【分析】 推薦入試・一般入試とも令和6年度の受験者を下回った。 推薦入試の減少は、公立高校への回帰ともいえる現象の影響も一因であると考えられるが、一般入試での減少は、競合私学の魅力向上に加え、広陵高校自体の新たな取り組みが少ないことが挙げられる。他校と比較した際に、特色や優位性を十分に打ち出せていないことが、相対的な魅力の低下につながった可能性がある。</p> <p>【今後の見通しや課題】 安佐南区からの入学生の割合は令和6年度の58.2%から56.2%に減少した。とくにお膝元といえる、ある中学校からの受験生を大きく減らしたことは、看過できない。旧市内や佐伯区の私学を選択する生徒が増えたということは、本校に足りないものがあるということだと考える必要がある。 令和7年度の在籍数がピークで、今後は減少に転ずると予想される。だからこそ、カリキュラムの再編成、土曜日の在り方など、根本にかかわる部分から、生徒・保護者、ひいては中学校の先生のニーズに合っているのか考え直す必要に迫られている。</p>			
地域別入学者数	●地区別入学者割合	令和5年度	令和6年度	令和7年度
	安佐南区	54.7%	58.2%	56.2%
	安佐北区	18.2%	17.3%	18.5%
	佐伯区	6.9%	6.2%	6.2%
	東、中、西、南区	5.9%	5.6%	5.4%
	その他の地区	14.3%	12.7%	13.7%
<p>【分析】 安佐北区ではスクールバスの運行が周知され、受験者数がわずかに増加した。一方、安佐南区では令和6年度に「減少傾向に歯止めがかかったと言える」と分析したが、再び減少した。このことについては「生徒募集と入学生について」の項目で述べた通り、特色や優位性を十分に打ち出せていないことが、相対的な魅力の低下につながった可能性がある。</p> <p>【今後の見通しや課題】 この点も「生徒募集と入学生について」の項目で述べた通りである。令和7年度は、本校をより身近に献じてもらえるよう、2～3件の新たな広報活動の取り組みを行う。</p>				
生徒像	<p>【分析】 国公立大学や有名私立大学などのいわゆる難関大学を目指す生徒も入学してくる一方で、硬式野球部、女子硬式野球部をはじめとした部活動を大きな目的として入学してくる生徒が2割近い。公立高校に比較し、入学生の学力の幅も、価値観の幅も大きく、まさに多様性を持った生徒像である。</p> <p>【今後の見通しや課題】 多様な進路希望に対応できる学校をめざすことは今後も変わらないが、とりわけ国公立大学を目指せる学校になることが重要だと考える。令和7年度、特進コースの強化を大きな目標に掲げ、来年度は新たな体制を組んだ。一方で、本校の大多数である総合進学コースをおろそかにすることはできない。特進コースが学習面でリーダーシップを示し、それに総合コースが刺激されるという好循環を生み出すべく、全校が一致しなくてはならない。その意味では、今年、広島大学に4人の合格者を出したことはよい兆候と言える。</p>			

<p>進路指導と顧客満足度</p>	<p>【分析】 進路調査（3年第3回）の質問①「広陵高校に入学して良かったか」②「進路先に満足しているか」③「あなたの進学先に保護者は満足しているか」への回答集計は以下の通り。 ①の「とても良かった」「良かった」の合計：96.1% ②の「とても満足」「まあまあ満足」の合計：97.8% ③の「とても満足」「まあまあ満足」の合計：96.1% 【今後の見通しや課題】 アンケート結果からは、改善点や課題は見当たらないが、前述したように、一般入試での減少は、競合私学の魅力向上に加え、広陵高校自体の新たな取り組みが少ないことが挙げられるとの分析から、特進コースを中心とし、国公立大学・難関私立大学への合格実績を上げる、あらたな取り組みが必要であり、すでに始めているところである。 その取り組みは、大多数を占める総合進学コースにも、好影響を与えるものでなくてはならず、学校全体で共有を図る仕組みも同時に作っていかなくてはならない。</p>
<p>1 学力の定着と個に応じた進路実現に努める</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ● 「わかる喜び」を実感させる授業展開 ● 自宅学習時間の確保 ● ICTツールの有効活用 ● 学習意欲の向上 ● 教職員の指導力の向上 ● 大学進学希望者全員で大学入学共通テストの受験を目指す ● 個に応じた進路指導を行い進路実績を高める 	<p>【分析】 令和6年度はChromebook導入の3年目で、生徒全員が持つことになった。その影響もあるのか、導入して1年目のClassiを、予想以上に活用することができた。次年度は学習コンテンツをさらに活用することを目指し、平日の自主学习について、時間・質ともにあげていきたい。 令和5年度に特進コース2年生対象で再開した学習合宿を、令和6年度は1、2年生の合同合宿に拡大した。2泊3日の短期間とはいえ、先輩の姿を見ながら“同じ釜の飯を食う”ことは、普段の学校生活にも学年を越えた連帯感を生むことに繋がっている。令和7年度はさらに拡大して行いたい。 【今後の見通しや課題】 今年国公立大合格者が令和6年度の11名から15名に増加した。地元広島大学に4名の合格者が出たが、この数字は国公立大合格者増加数と一致する。偶然とはいえ、このことは本校の目指す方向を示してくれた。生徒も、教員も広島大学が手の届く範囲であることを意識することができ、より高い目標設定を行うことに繋がるはずである。 また、年内入試による合格者が、国公立大でも増加してきた。本校でも探究活動を深化させることが急がれる。そのためにも、入試制度や就活戦線に関する情報だけでなく、全国津々浦々の先進的な活動、ユニークな試みを行っている学校に積極的に出向き、直接研修する機会を増やす必要がある。</p>
<p>2 自己指導力を身につけさせる</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ● 遅刻者を減らす ● 特別指導件数を減らす ● 転学者・退学者を減らす ● いじめを撲滅する ● 美化の徹底 	<p>【分析】 令和6年度は1学年15名、2学年13名、3学年3名の計31名が転退学をした。令和5年度よりは減少したものの、年度初めの在籍生徒数の2.1%にあたり、決して少なくはない。人間関係、生活指導上の理由、起立性障害などの理由から欠席日数が増え、原級留置となったケースなど、理由は様々だが、希望や目的を持って広陵に入学した生徒が卒業という形以外で学校を去ることは、慙愧に堪えない。 遅刻者数は1日あたり約22.0人と、令和5年度より2.8ポイントも増加した。遅刻の理由は、体調不良が最も多い。学年別では2学年が最も多かったが、3学年では、進路が決まりだした頃から増加した。 特別指導の件数は令和6年度より少なくなっているが、無断アルバイトなど、校則違反と認識しながらの行動が多い。 いじめ、あるいはいじめにつながる訴えが、いじめ体罰アンケート等で計15件あった。目標値としては0件を掲げているものの、実際には人間関係のトラブルや誤解を含め、いくつかは出てくるものと理解している。生徒が自分のことも、自分のまわりのこともタイムリーに訴え出ることができる仕組みが大切である。令和6年度の評価基準に照らし合わせると15件は評価1となるが、評価基準の変更を考えなくてはならない。</p>

	<p>【今後の見通しや課題】</p> <p>令和6年度は、校内に「転退学抑制プロジェクト」という組織を設け、メンバーが外部で研修した内容を、夏休みに校内研修で広めるなどの活動をした。転退学者が減少したのはこうした取り組みの成果が出た可能性はある。この取り組みは令和7年以降も続けていく。</p> <p>生徒数の増加により、今まで以上に多様な生徒を受けて入れている実態は否めない。またコロナ禍も、高校の修学に対する生徒・保護者の価値観も変化をもたらした。転退学者を0人にすることは、事実上困難であるが、進級ができず転退学するケースについては単位認定、進級・卒業の条件を再考することも考えなくてはならない。</p> <p>遅刻者、特別指導の件数を減らす、いじめを撲滅する方策としては、生徒に生じている変化や問題の早期発見・早期対応を目指した組織づくりを行うことが必要である。正・副担任とスクールカウンセラー等との連携を強化し、組織的な支援体制で個々の問題解決に取り組む。</p> <p>今までいじめ体罰アンケートを年間2回実施してきたが、令和7年度は3回実施する。それに伴い、時期や取り扱いを検証する。また、評価基準の変更を考える。</p>
<p>3.文武両道をめざした特別活動の活性化に努める</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ● 学校行事の満足度を高める ● 生徒会各委員会の活動を活発にする ● 部活動への参加率の向上を目指す ● 中国大会・全国大会の出場を目指す 	<p>【分析】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 満足度が高いことから学校行事は概ね成功であったと捉えている。 ◆ 委員会活動は図書委員の朝読書放送、蔵書点検、風紀委員による月間目標設定など、今まで行っていない活動を行った。 ◆ 部活動加入率の減少が続いている。年度当初に行ったアンケート結果から部活動に加入しない理由は、「他にやりたい活動や趣味があるから」(33.6%)、「その他」(31%)、「興味のある部活動がないから」(29%)、「費用がかかるから」(6.4%)という結果となっている。また、あったらよいと思う部活動「e-スポーツ」「家庭科(料理・被服)」が多く上がっていた。 ◆ 上位大会への出場については全国大会出場・中国大会は目標達成した。 <p>【今後の見通しや課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ ESD推進部としては学校行事、特に広陵祭において、生徒の希望の実現に向けて生徒会執行部をサポートする必要があると考えている。一方で、教員にもクラス企画をリードする能力が問われている。 <p>令和7年度は体育祭をグリーンアリーナで行う。初の試みなので、例年以上に早期から体育科、執行部等と綿密に計画、準備をしていく必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 委員会活動は関係分掌との連携が不可欠である。関係分掌が生徒会執行部と連携することが、生徒会活動の活性化につながると考えている。また委員会内の連絡事項は Google Classroom にて確認させ、委員会開催は必要最小限に留めていくことで、効率よい活動に繋げていくシステム構築を試みる。 ◆ 全国的に、中学・高校における部活動の在り方が問われている。教員の過重負担になっているという点がクローズアップされている。本校も部活動の在り方や再編成を議論しなくてはならないが、生徒の居場所、生徒の自主的な活動の場、生徒の多様な体験の場として、本校に不可欠なものであることは前提にしておくべきではない。 ◆ 上位大会への出場については数値目標をあげることはしないこととするものの、全国大会出場・中国大会を目標に活動する部活動への支援は今まで通り行う。

4.国際理解教育の充実・深化を図る	
<ul style="list-style-type: none"> ● 海外長期留学特進プログラム参加者数 2 名を目指す ● イングリッシュキャンプ参加者数 20 名を目指す ● サマープログラム参加者数 15 名以上を目指す ● 英語検定準 2 級以上の合格者を増やす 	<p>【分析】</p> <p>◆今年度は長期プログラムの準備段階で募集等を行える段階にない。現在は OKC 株式会社と連携して準備を進めている。</p> <p>◆イングリッシュキャンプ（次年度より「イングリッシュアクティビティ」と改名）の参加者は SEA プログラム参加者とその他の希望者で行った。一般の希望者が 3 名に留まった。教員からの直接の声かけ、広報の仕方が不十分だったかもしれない。</p> <p>◆SEA プログラムは円安が大きく影響し、参加費用が跳ね上がっていることが参加人数を抑制した大きな原因ではないかと考えている。</p> <p>【今後の見通しや課題】</p> <p>◆留学プログラムの呼名を整理し直す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校の留学プログラム全体の呼名→SEA (Study and experience Abroad) プログラム ・サマープログラム/今年度使用した SEA プログラム→SEA プログラム (短期) ・海外中・長期留学特進プログラム→SEA プログラム (中期・長期) <p>◆円安が継続する限り大幅に参加者が増加することは考えにくい。費用面のサポートがあればよいと考えるが財源をどうするかが課題である。過去の映像を見せたり、参加経験者の生の声など発信したりして参加希望者や受験希望者を募る。</p>
5.保護者や地域に開かれた学校づくりに努める	
<ul style="list-style-type: none"> ● オープンスクール等の広報活動を充実させる ● ホームページを効果的に活用し、保護者や地域社会に対して、積極的かつ迅速に情報を提供する。 ● 地域の行事や清掃活動、防犯活動等への生徒の積極的参加 	<p>【分析】</p> <p>◆コロナ禍が明け、地域の行事も再開されてきた。それに伴って恒例の行事については参加できている。今年度は「伴学区クリーン作戦」はサッカー部の参加があったことで生徒参加者は 41 名(令和 6 年度は 16 名)。顧問からの投げかけがきっかけと聞いている。やはり教員からのアプローチが参加に大きく影響することが窺える。</p> <p>参加行事は伴地区に限れば「伴学区ふるさと祭り」に茶道部、フォークソング部、体操競技部がジムフレンズのメンバーとして参加。その他、ダンス部、吹奏楽部が様々な地域の行事の舞台に参加している。</p> <p>◆オープンスクールでは吹奏楽部の演奏、放送部による司会・部活動のユニフォーム紹介・生徒会執行部や生徒ボランティアによる校内案内など、生徒主体のオープンスクールは毎回好評である。特に、生徒たちの主体的なボランティア参加が来場者に学校の活気や雰囲気直接伝えることができる点が評価されており、保護者の参加者数も加えると年々増加傾向にある。また、参加者の多くが部活動紹介や校内案内に高い関心を示しており、参加後のアンケートでは「生徒の姿から学校生活のイメージが具体的に湧いた」という声が多数寄せられている。このような取り組みが、広陵高校の人気につながっていると考えられる。</p> <p>【今後の見通しや課題】</p> <p>「地域」が示すエリアを伴地区に限定せず、広島市と考えていきたい。また、多種多様なボランティア活動の案内があり、個別で生徒たちがそれらの行事のボランティアとして参加している。以前よりもその参加状況は活発になっていると感じている。今後も依頼内容を精査して、生徒への案内を積極的にしていくことで、その参加は見込めると考える。</p> <p>地域行事やボランティア活動の内容や参加者の延べ人数などを広報部と連携して積極的に SNS での広報に使ってもらおうようにしていく。</p>